

## 第58回日本小児保健協会学術集会 交流セッション3

## ネット社会における子どもの生活と養護教諭のかかわり

ファシリテーター 後藤ひとみ (愛知教育大学教育学部)

富田 正美 (愛知県教育委員会健康学習課)

## I. 本セッションの趣旨

中央教育審議会答申「子どもの心身の健康を守り、安全・安心を確保するために学校全体としての取組を進めるための方策について」(平成20年1月17日)を受けて、翌年4月1日より学校保健安全法が施行されている。この答申において、学校安全は学校の内外において子どもが犠牲となる、あってはならない事件・事故、交通事故や自然災害などと説明されているが、子どもの安全をめぐる課題として次のことも指摘された。

「近年、情報化の急速な進展により、子どもが携帯電話やパソコンを利用する機会が増加しているとともに、違法・有害情報サイトを通じた犯罪等に巻き込まれたり、携帯電話等を使ったいじめが発生するなどの問題が起きている。子どもたちをインターネット上の有害情報から守り、また、子どもの情報モラルを育成するためには、学校、保護者のみならず、企業や地域社会が一体となって取り組むことが重要であり、これらの取組とも連携を図ることが求められている。」

そこで、ネット社会における子どもの生活、特にケータイから見えてくる現代的課題を捉え、そこにおける養護教諭の役割について考えることにした。

## II. 基調提案「子ども社会のケータイと危機管理」

熊本市立河内中学校教頭 桑崎 剛

## 1. はじめに

子どもたちのケータイについては、昨今、マスコミで多くの報道がなされ、社会問題化しつつある。文部

科学省では従前から「学校への持ち込み禁止」の通知をしているが、新しい学習指導要領では、総則において「子どもたちの情報モラルをどう育成していくか、家庭でのルールづくりをどう促進していくか」という根本的で重大な課題への積極的な取り組みが明示された。子どもたちが「どう育てられれば、将来、ケータイを上手に賢く使用するようになれるか」、そのために保護者や教育関係者は「どうすれば子どもたちを育てられるのか」について今までの実践を通して考えてみたい。

## 2. 情報社会の現実

近年の情報社会の進展は目覚ましく、TV電波も今年からデジタル化され各種の情報サービスが始まった。また、2000年からデジタル化された携帯電話は電子メールやウェブ利用等のネットサービスが提供され、病院の予約や通販の利用など、生活コンテンツが幅広く利用されている。都会では、電子切符や電子財布が普及し、駅で切符を買うことはなくなりつつある。そして、日本におけるケータイは「通話」よりもネット、その他の利用が多いという不思議な状況となっている。この現状は世界の他の国々とはかなり異なり「日本のケータイはガラパゴス」と揶揄されるに至っている。欧米ではケータイは「通話」が今も中心で、あくまでも携帯電話である。

民間の研究機関が、昨年、まだケータイを持たない小学校1年生に、ケータイについてイメージ調査をした。「ケータイって何ですか?」の問いに対し、メールが出来る、写真が写せる、ゲームが出来る、など

後藤ひとみ 愛知教育大学教育学部 〒448-8542 愛知県刈谷市井ヶ谷町広沢1

Tel: 0566-26-2491

に続き、「電話も出来る」という回答が5番目だった。6～7歳の小学校1年生が、物心がついた4～5歳からの2年間に自分の周りの大人たちや、高校生・大学生のお兄ちゃん、お姉ちゃんたちが、ケータイでメールを打っている姿やウェブを利用している風景を多く見てきた結果である。

### 3. 保健室から見えること

私が一昨年勤務していた小さな中学校で、冬休みの最終日における3年生46名のメールの処理件数を養護教諭の先生が調査したところ図1のようになった。この地区は全国から毎年100万人もの観光客が訪れる有名な温泉を有し、政令指定都市への移行を目前に控えた熊本市からは1時間以上も離れた山間の落ち着いた町で、町内にはケータイ・ショップは一軒もない。子どもたちのケータイ所持は都市部よりは低率ではあるが、その利用に関する実態はさほど変わりなく、深夜までのメール利用により、早朝から保健室を訪れる生徒の実態も都市部とあまり変わりはない。

特に最近、女子生徒の間では、「オヤスミ・メール」という深夜の「行事」が子どもたちに悪影響を与えている現状がある。仲の良い数人の友だちの間で、相互に「オヤスミ・メール」を絵文字つきで送信・返信し合うといった、際限のないメールの往復になり、そのために睡眠不足になっていると予想される。このことは、全国に約4万ある保健室のあちこちで見られる現象だと思われる。

そして、子どもたちにとっては、「オヤスミ・メール」をどのような方法で中断するか、という重要かつ緊急の課題がある。「家族の決まりで〇〇時以降のメールは禁止されているから」など、メールを中断するた

めのノウハウを編み出す必要があるとも聞く。また、一方では、「12時以降の深夜のメールは非常識・迷惑」との認識を持ちつつも、思春期特有の友だち関係からその対応に苦慮する生徒の様子が浮かぶ。そこから子どもたちを救うにはどうすればよいか？ 情報モラルの育成のための取り組み、とりわけ、コミュニケーションのあり方について周りの大人たちからの適切な指導が最も必要である。

### 4. 子どもたちの実態

小中学生のケータイ利用や所持等の実態について、大阪府寝屋川市教育委員会の調査（「学校教育相談」2009年6月号より）では、「所持」および「メールの件数や一日の利用時間」について男女に明らかな有意差があり、ほとんどの項目で女子が20%近く高い数字となっている。特に、利用時間についてはメールによる時間が多くを占めると予想され、同調査によると、男子のメールは10通未満が一番多いのに対し、女子では30通以上が50%以上もある。一つのメールに5分を要したとして、150分もの時間を浪費することとなり、「勉強に集中できない」との指摘も女子生徒からしばしば聞く。ケータイの問題は、特に女子生徒の問題だとも言える。

また、同教育委員会では、メールの利用数との因果関係も分析し、メールの利用数が1日あたり30通以上の生徒、30通未満の生徒、およびメールを利用しない生徒との相関も見出ししている。メールが30通以内というある程度自制が効き、コントロールが出来る児童生徒は、30通を超える利用をする子どもとの有意差が認められると言える（図2）。

また、熊本県の中学校養護教諭の調査（2008年7月）では、ケータイの購入動機は、「家族との連絡のため」という一番目の理由に続き、「みんなが持っているから」という回答が二番目としてはほぼ4分の1もあったとの報告があった。小学生ならともかく、中学生の購入動機としてはいささか驚くとともに、その購入動機をもとに、実際に購入をしている保護者の姿がある。「ケータイが欲しい」と「ケータイが必要」は大きく異なる。「欲しい」と「必要」はイコールではなく、友だちが持っているからというのも購入動機にはならない。子どもたちはケータイが「必要な理由」を、そして親は自分の子どもにとって所持は「適切か」をしっかりと議論する必要がある。購入に際しては、「よそ

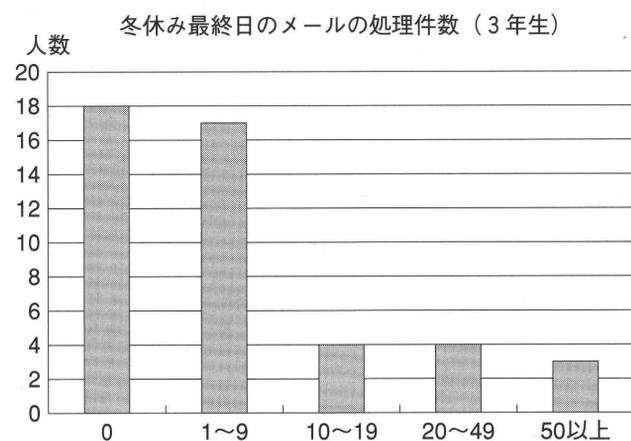


図1 熊本県の山間部の中学校でのメール処理件数(2009年1月)

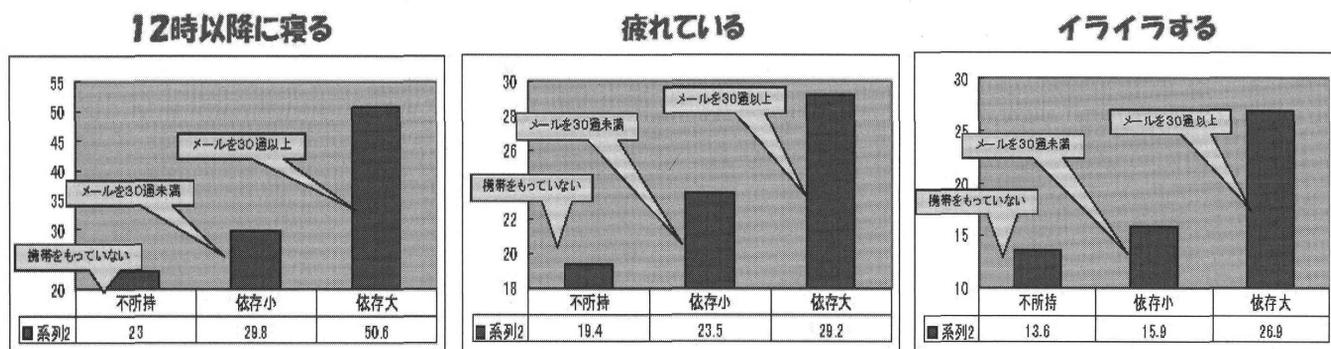


図2 メールの利用数と小中学生の生活状況

の子が持っているから」という横並び意識や、「成績が何番上がったから」、「部活動で勝ったから」、「お誕生日だから」、「高校に合格したから」というご褒美的な要素ではなく、「自分に（わが子に）とって購入は適切か」という最も大事な考えを浸透させていくことが急務だと考え、「ケータイ契約書」というタイトルの学習シートを利用し、ケータイを購入する目的や利用する場所や時間、利用するウェブサイト、料金の支払い方法などを考えさせる実践に取り組んでいる。そして、その学習シートは学習後、家庭に持ち帰らせ、保護者と話し合いをするように指示している。実践を重ねれば重ねるほど、購入の動機や目的を考えさせることが、その後の利用に大きなプラスを生じさせると確信しつつある。

### 5. まとめ

ベネッセ教育研究開発センターが発表した中学生対象のアンケート結果では、「保護者の目を意識する生徒ほど使い方に気を配る」とのタイトルで、使い方のルールを「決めている」家庭は所有者の約4割であった。「親は自分のケータイ利用の状況がある程度わかっていると思う」と答えた生徒ほど利用マナーが良く、自制した使い方をしている傾向があるとの分析であった。そのため、親のあり方は子どもの規範意識と密接な相関関係があると言え、周りの大人たちの「子どものケータイに関する関心」がある意味で子どもの規範意識を育てることに繋がるとも言える。

### Ⅲ. 事例紹介

倫理的配慮として、学年を明記せず、内容に影響しない範囲で修正を加えている。

名古屋市立名古屋商業高等学校養護教諭 道坂美加

名古屋市立緑高等学校養護教諭 山田恵子

#### 1. 携帯電話でしか友人関係がつかれないA

##### <事例の概要>

体調不良を訴えて保健室に来室し、友人関係で悩んでいることを話し始める。Aは高校入学前に、SNS（ソーシャルネットワーキングサービス）で同じ学校へ進学する人を検索し、コミュニティをつくっていた。携帯電話の中で交流し、高校入学後は同じコミュニティの仲間と過ごすようになるが、「最近になって仲間と気が合わないと感じる。仲間のブログには自分の悪口と思われることが書かれている。」と話す。Aを含めた多くの生徒が携帯電話を使って友だちづくりをしている。Aのグループの仲間は、友だちと直接会って話をする事ができない。

##### <養護教諭のかかわり>

Aに対して継続的に声かけを行い、直接顔を合わせて話をする事を意識させた。全校生徒に対して、保健だよりや掲示物で、携帯電話の正しい使用についての啓発を行った。

##### <この事例から見てきた課題>

携帯電話を通して友人関係を築くことが、子どもたちの間で一般化している。子どもたちは、携帯電話やパソコンのインターネット機能で、他人と繋がることに不信感や危機感を抱いていない。携帯電話でのコミュニケーションを重視している子どもたちに、携帯電話のあり方について考えさせる機会が必要である。

#### 2. ネットでなら自分のことが言えるB

##### <事例の概要>

保健室利用は特になく、校内で会ったときに挨拶を交わす程度であったが、ある時、暗い表情で来室し、「恋人とうまくいっていない。」と話す。恋人とは県外

に住む同性の高校生で、SNSを利用して知り合っらしい。恋人がメールで束縛し、ヒステリー症状が激しくて困っていると言う。学校の友人には打ち明けられないプライベートな悩みを抱えているが、ネット上では隠さずに打ち明けることができるなどメールに依存している。

#### <養護教諭のかかわり>

スクールカウンセラーと連携し、Bの心のケアに努めた。全校生徒を対象に、携帯電話会社によるケータイ教室を開催し、携帯電話のインターネット機能を利用することで生じる危険性などを知らせた。

#### <この事例から見えてきた課題>

顔を晒さないネット上であれば、どんなことも表現できてしまう子どもたちがいる。ネット上には、自分に理解を示してくれる誰かが必ず存在している。ネット上に自分の居場所や存在意義を見出す子どもに、どう対応したらよいかは課題である。

### 3. 携帯電話から子どもの情報を得ようとする父をもつC

#### <事例の概要>

Cは一人っ子であるが、両親とは仲が悪く、よく保健室へ来て愚痴をこぼしていた。ある日のこと、登校直後に泣きながら来室し、父親に携帯電話のメールを見られ、自分の交友関係についてひどく叱られたこと、怒った父親が携帯電話を壊してしまったことを話す。良好な親子関係が築けておらず、子どものことを知りたいという保護者の気持ちが携帯電話を見る行為に繋がってしまった。

#### <養護教諭のかかわり>

Cの話をよく聞き、学級担任と情報交換を行って保護者に連絡を取ってもらった。Cの思いを保護者へ伝え、家族で話し合う機会をつくるように促した。

#### <この事例から見えてきた課題>

携帯電話には、交友関係や生活の様子などたくさんの情報が詰まっている。携帯電話をどのように利用するのか、親子でルールを決めていない場合が多い。急速に社会へ浸透した携帯電話に対して、親世代の大人たちも正しい認識を持てずにいる。

### 4. メール交換していた相手から脅迫めいた返信が来るようになったD

#### <事例の概要>

人気ロック歌手の追悼コンサートで他都市へ出かけるとき、ファンの人たち数人と仲良くなり、中でも40代男性と意気投合し、赤外線でメールアドレスを交換した。初めのうちは共通の話題で盛り上がっていたが、そのうち頻繁に来るメールにうんざりしてきた。ただし、アドレス交換時にプロフィールも一緒に送信したため、住所などの情報も知られている。ある日、「授業あるので」と返信したのに、こちらを無視したメールに嫌気がさし、「もうメールしてこないで」と送信したところ、「あなたからの連絡がないと心配になる。家もわかっている」、「僕は自殺する。生きていたらまた会おう」などのメールが送られてきて怖くなり、保健室に来室した。

#### <養護教諭のかかわり>

生徒の話聞き、精神的な安定を図ると共に、担任や指導部などの他教諭とも情報交換した。本人から家族にも状況を報告し、自宅付近に不審者がいないか注意してもらおうよう喚起した。本人には、相手を刺激しないように、また、今後はアドレス交換時に十分に注意するように指導した。

#### <この事例から見えてきた課題>

初対面のよく知らない人に自宅住所を教えるなど、ケータイでどれほどの個人情報相手が知られるのかという危機感がない。メールが来たらずに返信しないといけないという追い詰められた気持ちになる半面、気持ちが乗らなくなると相手との断絶を図ろうとする。また、相手が自分の気持ちを受け入れてくれないとどうしていいかわからずパニックになるなど、ケータイでの距離感がつかめずに振り回されてしまう。

## IV. ま と め

フロアからは生徒たちへの利用方法の啓発が重要であるとの意見が出された。基調提案におけるケータイ利用への提言は、高校生の事例に対しても有効な視点と言える。また、ケータイを介して顔も見ずにネットで繋がり合う人間関係が作られている状況などから、子どもや保護者の規範意識を育てることが重要になる。